

山犬の尾 C—5 号墳の測量調査

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

伊藤和雅 川村 高 坂本繁俊 武田満喜 立石忠夫

谷口正和 中澤勝之 松岡治雄

（以上博物館ボランティアの会他有志ボランティア）

1. はじめに

山犬の尾（ヤマイヌノオ）古墳群は糸島市と福岡市が分水嶺で境を接する高祖山（標高416m）の西南裾に派生する尾根とその谷間に分布する後期古墳群である。前原市文化財分布地図（1998年作成）には37基が掲載されている。

古墳群は伊都国歴史博物館から自動車で5分ほどの近距離にあり、農道のすぐ傍らで円墳の並びを観察することができるなど、将来は博物館の館外学習での活用も期待される。

博物館では、これら身近な古墳の周知・保護を図るため、博物館ボランティアの会の会員をはじめとする有志諸氏と共同で古墳の確認調査を実施しており、その一環として当該古墳群で唯一の前方後円墳である C—5 号墳の測量調査を実施したので、その成果を報告する。

なお、現地測量は、平成24年3月8日から開始し、同年5月18日で現地での測量作業を終えた。

2. C—5 号墳の測量成果

周辺の古墳 1号墳の北40mには隣接して横穴式石室の小円墳（4号墳）がある。また、西30mには大型の石材で構築した横穴式石室（半壊）を主体部とする3、4号墳が立地し、この4基が小グループを形成している。3号墳は墳高4m、墳丘径15mほどあり、他のグループの古墳よりも大型で、1号墳に次ぐ規模を有する（第1図）。

墳丘の規模・形状 古墳は、主軸をN59°-Wに向けた前方後円墳である。全長22m、後円径14.4m、前方部長9m、幅12.3m、墳丘の見かけの高さは左右で異なり、西南裾からみると後円部の高さは4.0m、前方部は1.64mであるが、北東側からではそれぞれ2.5m、1.1mとなる（第2図）。後円部に対して前方部の高さが著しく低く短いことが特徴で、同様の形態の前方後円墳として近隣では王丸浦ノ田B—1号墳、屋敷1号墳、

飯氏B—14号墳、砂魚塚1号墳などがあり、いずれも全長30mに満たない小型前方後円墳で、後期古墳群中、ないしはその隣接地に築かれている。**墳丘の特徴** 墳丘はこぶ状に隆起した尾根頂部の南西側に寄せて築かれている。

前方部は、主に地山整形によって、また後円部は主に盛土によって整形されたとみられる。現状では段築は認められない。

主体部 主体部は、後援部の中央に構築された横穴式石室である。天井石は崩落し、石室内に大量の土砂が流入しているため、石室構造の詳細はわからないが、陥没墳の西隅に直角に角をとる石積が顔を出していて、西南～北東方向に1.7mほど伸びている。このことから石室は主軸に直交する北東方向に開口する横穴式石室と推定した。玄室長は3.2m、幅は1.7mぐらいと考えられる。

壁面に使用された石材はやや大きめの花崗岩の転石を使用している。

出土遺物等 土器等の出土品は確認できなかった。埴輪もみられない。

古墳の築造時期等 糸島地方では、6世紀中頃に築造された小型前方後円墳が数多く確認されているが立地環境、墳形が類似する例として砂魚塚1号墳があり、墳丘の選地、墳丘の整形方法などに共通点が多いことから、築造時期も極めて近いものと推定される。被葬者は山犬の尾古墳群の構成集団を統括したであったと考えられる。

3. おわりに

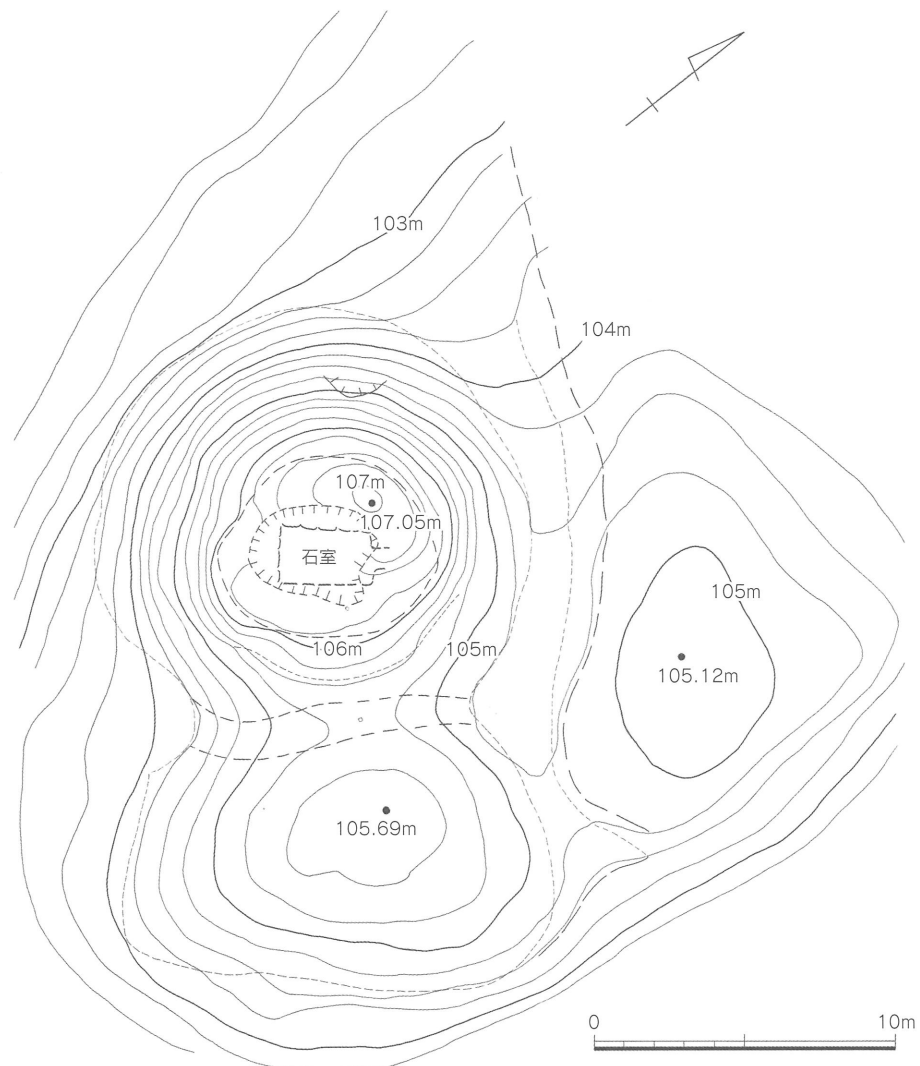
今回の測量調査は博物館とボランティア有志と共同で行った初めての本格的な調査活動であった。短い期間ではあったが地域の文化財について手を携えて学び守る実践活動に取り組むことができたことは大きな喜びである。

最後になりましたが、測量調査の実施にあたり快諾いただいた地権者の大神正和氏に記して感謝申し上げます。



第1図 山犬の尾古墳群の分布 (1/6,000)

139がA群、140がB群、141がC群で、各古墳に付された番号が古墳の号数に対応する。143・147～149は柵古墳群。



第2図 山犬の尾C-5号墳現況測量図 (1/250)